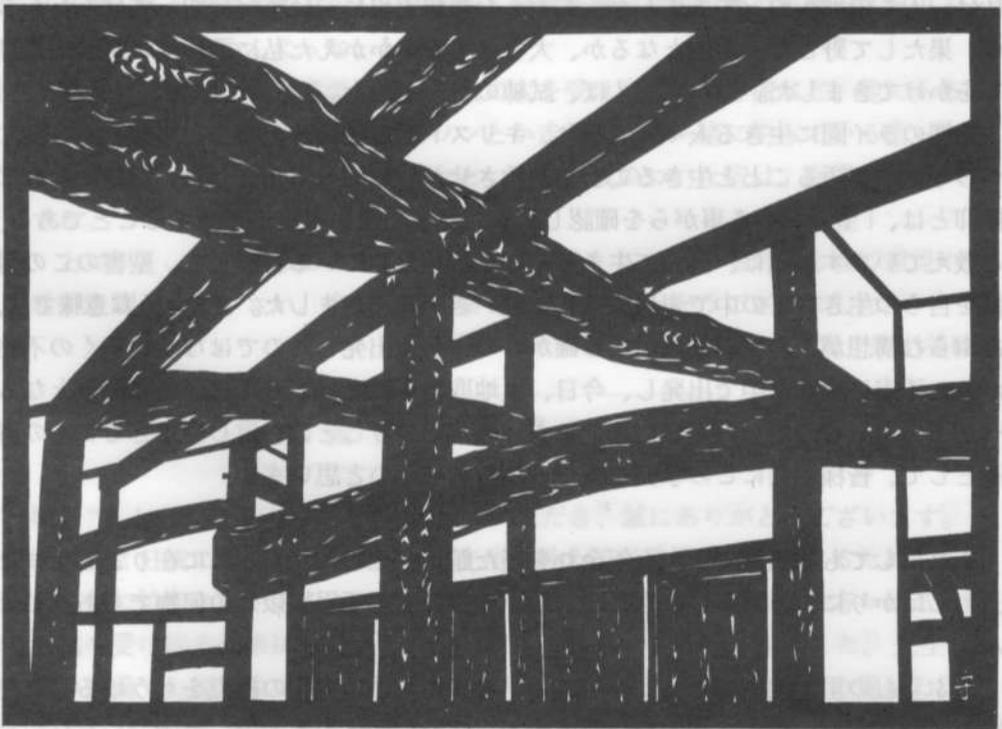


# あぶらむ通信

第9号 1990年12月14日 あぶらむの会発行

〒509-41 岐阜県吉城郡国府町字津江 TEL 057772-4219



飛騨古川町在住 切り絵作家 菅沼 守氏作

飛驒だより

長い間待望し、夢にまで見た「あぶらむの宿」が、多くの人々の祝福の中に竣工式を迎えました。宿建設のあまりものスピードの速さに、私たちはただただ日々追われるばかりで、その喜びをかみしめる余裕などはありませんでした。しかし、竣工式を終え一段落した今、ついこの前まで草ぼうぼうの荒地に、この山里の貴婦人のごとく純白壁の館が立派に立っている姿を見るにつけ、夢ではなかったことに驚きと、ふっふつと沸上がる喜びと感謝に胸がはりさけんばかりです。ご支援下さっている皆様や、建設に多大な御協力をいただいた地元の皆様に、何と云って御礼を申し上げてよいのやら、その言葉さえ見当りません。ただただ感謝です。本当にありがとうございました。

「鑿を研ぐ 手に降る寒雨 飛驒の春」、出来不出来は別としてこの句は私にとって生涯忘れることはできません。五年前、わずかばかりの信仰とあぶらむ構想を胸に、私は一人この地へやってきました。あぶらむ構想実現に向け啖呵は切ってはみたものの、果たして野となるか山となるか、大きな不安をかかえた私に飛驒地の寒さが追打ちをかけてきました。今から思えば、試練の日々でした。

沖縄のライ園に生きる人々に導かれ、キリスト教の牧師を天職とした私、不十分ながらも自らが語ることに生きることを一致させたいと願ってきました。聖書によれば信仰とは、「望んでいる事がらを確認し、まだ見えていない事実を確認することである」と教えています。私は、信じて生きることを職業としている者として、聖書のこの言葉を自らの生きざまの中で表現すべしと云いきかせてきました。そのような意味では、あぶらむ構想がこの世的な大いなる確かさの中から出発したのではなく、多くの不確かさ、不安に満ちた中で出発し、今日、土地取得を終え、さらには活動の拠点となるべき「あぶらむの宿」の完成にまでこぎつけたということは、信じて生きることの勝利として、皆様と共にこの事実を喜び分かちあいたいと思います。

それにしても不思議です。百年余りを経た館が、その昔からここに在りましたヨと云わんばかりに、あぶらむの里に建っているのです。不思議以外の何物でもありません。

あぶらむの里土地取得と共に、一刻も早くこの土地に生活の拠点をもうけることを願ってきました。莫大な費用を必要とする宿建設には体力不十分、近所でいただいた納屋を改造して自宅にあてることにしました。しかし、幸か不幸か、解体した建物は白蟻にやられており使用不能、「何を建てるにしても手間賃は同じなのだから、建てるなら納得のゆくものを建てたらどうか」という片町棟梁の一言で、自宅と宿を併せた建物を建てることに決心しました。そしてそれから花嫁探し。本命候補に幾度も肘鉄砲をくらいながらも、周囲の人々のお力添えでどうにかお嫁入り。しかし、彼女を受け入れる経済基盤など何一つないあぶらむでした。

「自分たちで出来ることは可能な限り自分たちで」、これはこれまで、そしてこれか

らもあぶらむのモットーですが、プロの人々にとってはやっかいなことです。なぜなら人は、ここは素人、ここは職人がやったところと区別して見てはくれません。全てが請負った職人の仕事として評価されます。素人との協働などもっての他なのです。



しかし、全てをおまかせする経済的余裕などありません。自分たちでできることは自分たちでやるしかないのです。それには素人だからという甘えを捨て、しっかりとした仕事が出来ようになるしかないのです。これは私にとっても大切な学びでした。最初は迷惑そうな顔をしていた片町さんから、いつまでに〇〇をしておけよと云われた時、本当に嬉しく思いました。限りない素人と限りない職人が、一緒になって作りあげて行った一つの世界、これも一つの不思議です。

また春になり花嫁を迎えるべき基礎工事にとりかかったとき、私たちにはその工事資材を購入する資金もありませんでした。支払いは一ヵ月後だからその間にどうにかしよう、例によって例のごとくのいいかげんさで工事スタート。そんな私たちにTさんより資材費の寄附。このような不思議がいくつも重なりあって宿が出来たのです。

カーテン布地を寄附してくれた卒業生のS君、それを縫って下さったMさん、自分に出来ることはこれだけと入社前後に来て拭き掃除をして下さったOさん等々、宿建設にお寄せ下さった皆様のお気持ちを列挙しだしたら切りがありません。世の中に贅を尽した館は多々あるが、これほど多くの人々のおもいを尽くした館はそんなにはないと思います。

このように、このあぶらむの宿建設に携わった職人さんをはじめとする多くの人々のおもいにつつまれて、ここに休む旅人はきっと疲れを癒され、新たな力を得て旅立っていくことを強く確信します。

宿の完成をもって建設の仕事は一段落したように思います。他に必要な建物といえば、ここで共に働くスタッフの家です。これからの私たちの仕事は、この活動の拠点となるべき宿をどのように用いて行くかということです。いよいよ働きの中味が問われる時となりました。土地取得と宿の建設はほんの第一歩、これからが本番です。どうぞこれまでに倍しまして、私たちの働きをおぼえ、お祈り、ご支援下さいますようお願い申し上げます。

今年はやがて穏やかな冬の幕開きです。しかし、やがてあの寒さが訪れてくることと思います。皆様の暖かなご支援を暖にして、来る寒さにむかいます。

末筆になりましたが、皆様お一人々のご健勝を切にお祈り申し上げます。

「あぶらむの宿」、皆様のおいでを心よりお待ちしております。

1990年11月 あぶらむの会代表 大郷 博

## 「飛驒のめでた」で祝われた宴

鶴川 貴子

11月24日に行われた、あぶらむの宿の竣工式に行って参りました。

外側から見たあぶらむの宿は、その堂々たる大きさ、白壁と黒い木のコントラストの美しさ、まわりの山や林と溶けあう様子など、どこをとっても素晴らしいものでした。

長い飛驒の歴史によって培われてきたこの建物以外にあぶらむの宿としてふさわしいものはあるまいとさえ思われました。

すっかりいい気持ちになって玄関から一歩中にはいると、土間というにはあまりに広い土間から、さらに広いお座敷から、廊下から、何から、作業途中のいろいろなものが置かれていました。うーん、間に合うのだろうか、という心配をしている暇もなく、そこにいる全員が働いているのです。三日前にトイレが、二日前に水道が、そして、前日の午後になってようやくお湯が使えるようになりました。そしてボイラーのほか、階段、洗面所、トイレ、お風呂などが当日24日の午前中に完成したのです。ギリギリとはいえ結局間に合わせるあぶらむにはいつもながら感嘆しますが、今回は大工さんや職人さんたちの力によるものだけに有難く、あぶらむを支える輪の広がりを感じました。中でも階段の取付と檜のお風呂は圧巻で、別の場所で組み立てられた階段を運び込んできた時、「白木ってこんなにきれいなんだ」と再認識するほど色も形も生まれたてのみずみずしさがあって、まるでオブジェのようでした。いざ取り付けという時は、出来上がっていく宿の姿をひとつひとつ確かめていくような気持ちで、大工さんの仕事を見せていただきました。今、何かができる過程をこうやって丁寧に見ることのできる機会がないなあといいながら――。檜のお風呂の素晴らしさについては、是非皆さんにもゆっくり浸かって味わっていただきたいと思います。

準備のもう一つの柱であるお料理の方は、育さんを中心に、味岡和子さん、野村のお母さん、洞さん、白石さんなどいつもあぶらむがお世話になっている奥様方の大奮闘と、岐阜からわざわざ腕を振るいに来て下さった本職の料理人、服部さんの六面八臂の活躍で、素晴らしい手作りの品々が並びました。オードブル、焼き豚、おさしみ、お赤飯、姫竹の子の煮物などなど、まさに、暖かみあふれるご馳走の数々でした。

さて、ようやく準備も整い駐車場係と下足番が走り回る中、式に来て下さったのは、まずこの宿を建てるにあたってそれぞれの仕事を引受けて下さった、飛驒の大工さん、左官さん、職人さん方。いつもながら絶えず応援して下さる川上国府町長はじめ国府や古川、高山の皆さん。そしてそのご家族。東京方面からは、あぶらむの会後援会代表の八代主教、事務局長の西田さん、甲藤翁率いる松戸教会の皆さん、飛驒150キロを走った森川さんと海宝さん、立教大学の学生、およびそのOBたちでありました。総勢100余名の大会衆が、余裕で座った宿の広さをご想像下さい。老若男女、何の垣根もなく、ただあぶらむを支える者としてそこにいる姿は、七福神と天使見習いたち



完成したあぶらむの宿の宿泊客第一号となった方々



台所も大忙し、中央が育さん

土間から玄関へ



なんと総ひのき造りのお風呂



階段の取り付け作業



大郷代表のあいさつ、感無量



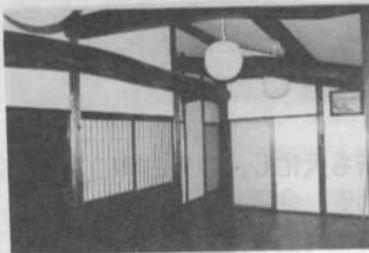
鏡開き



感謝を込めた記念板



賑やかな笑い声は夜更けまで



2階の個室入口



里の全景、左に木工所、中央に宿、右に物置き  
左の林の奥が多目的ホール

の大宴会のようでした。

竣工式は洞さんの進行ですすめられ、まずはあぶらむの会代表の大郷先生のご挨拶。先生がお話になっているその間、台所では育さんが正座してじっと聞き入っていました。本当に、ここまで来ましたね、育さん。

そのあと八代主教より、「あぶらむ」の名前の由来をからめたお話がありました。それから、地元の皆さんを代表して川上町長からお祝いの言葉をいただきました。国府の皆さんにこの地をあぶらむに譲っていただいてから約4年。長かったとは思えません。いえ、正直言えば思った以上に早くこんな立派な宿が完成しました。それも、多くの人の理解と、理解した気持の現われがあったからです。この宿も、片町建築さん、柳組さん、洞邦宏さん、片町板金さん、長谷左官さん、スミ装飾さん、下形設備さん、渡辺電気さん、山口建具工芸さん、岩下製畳さん方が、商売を越えた心意気で、素晴らしい技術を破格の費用で請負って下さったおかげです。式では、皆さんの気持にあぶらむなりのやり方でお応えしようと、写真のような記念板を宿に掲げました。この板には八代主教が聖水をふりかけて下さいました。

食前の祈りの後、いよいよ大宴会の始まりとして鏡開きが行われました。小槌を握るは、川上町長、大郷先生、八代主教、そしてあぶらむの会後援会事務局長で、日夜募金とあぶらむ債の領収書を手放さない西田さんの4人です。宇津江区长さんの音頭で乾杯した後は、御馳走とお酒が入り乱れ、正統派の大饗宴の突入です。おなじみ相撲甚句あり、どどいつあり、興奮のあまりの停電あり。でも、これまでのどの宴会より素晴らしかったのは、宴の一番始めに歌われた祝い歌「飛驒のめでた」と呼ばれている歌です。最初に調子を取る独唱があり、その後全員の大合唱になるのですが、穏やかで明るい旋律、70人もの声一つにそろい、土地の心を豊かに伝えてくれました。全員が背筋を伸して歌う姿に、東京勢は聞き惚れるばかりでした。聞けば、「飛驒のめでた」はその町によって少しずつ異なり、こんなに近くとも今回歌ったのと高山市のではまた違うそうです。それでもみんなその町々のバージョンを覚えていて歌えるのです。皆さんからいただいた山のようなお酒やお祝いと合わせて、この「飛驒のめでた」は心に残る贈り物になりました。そして、あぶらむからのお返しとして、切り絵作家の菅沼さんにデザインしていただいたあぶらむTシャツを皆さんにお持ち帰りいただきました。

大坪さんの音頭による三三七拍子の中締めの後も延々宴は続き、あぶらむの夜は更けていきました。あまりの熱気にあてられて、ちょっと涼みに外に出ると、星の明りで道が見えるほどの満天の空。東京のように弱々しい星ではありません。ここでは、星も、木も、川も、生命力旺盛です。せれでいて誰もお互いを損ったりしません。振り返れば宿は明々とまわりの闇を照らしながらも、林の中にしっとりと熔け込み、星の光も消さず、川の音も消さず、ただ暖かい人間の家としてそこにありました。ここでなら、傷ついたり疲れしたりした人々が癒され、この国府の地を第二、第三のふるさととしてまた旅立っていける、と自然に思えるものがありました。にぎやかな宴会の続く宿はたくさんの期待と可能性に満ちながらも、ゆったりとたたずんでいました。

## あぶらむの宿完成に寄せる言葉

### あぶらむの宿の建築に関わって

寄稿者紹介 あぶらむの宿の建築をひきうけて下さった片町建築棟梁。「飛驒の匠」の技と心意気を地で行く人で、この人なくしては宿の完成はありえなかった。あぶらむ関係者、この人に足を向けて寝るわけには行きません。

(大郷)

片町建築 代表者 片町恒司

遠山の頂きに雪が光り。飛驒の山が紅葉から時を移して冬の訪れを告げております。この度縁あって、「あぶらむの宿」の建築に、微力な私が携わらせて頂く事ができ、今完成の日を迎えることができました事は、私にとって大きな感動であり、人生のページに新しく加えておきたいと思えます。

大郷博様との出逢い。さらには会員の皆様の心からなる奉仕の姿にも新たな感動を覚えました。今までにない体験をさせて頂くことができたことも、「あぶらむ宿」の建築をさせて頂いたお陰だと感謝致しております。

大変古くさびれた家屋であったものが多くの人達の愛と善意によって、見違えるように立派によみがえり、皆様の心のよりどころとして活躍の場となることを願ってやみません。

こうした、素晴らしい「あぶらむの宿」の建設にあたって陰の功労者の一番手に上げたい人が居ます。その人は大郷夫人です。本当に御苦勞様でした。

何卒会員の皆様には、こうした素晴らしい「あぶらむの宿」と結ばれた事を飛躍の第一歩とされ、さらに前進されることをお祈りして私の御礼の言葉とさせていただきます。

飛驒の匠・片町建築が

日本の伝統工法で

心をこめて建築致します



関心のある方はあぶらむの宿へ

お問い合わせ下さい。

## 「神の意志としてのネットワーク」

飛驒の国の名刹、真言宗「千光寺」住職。宗教者として常に人間の在りようを問い続け、特に青少年の教育に熱心で、飛驒一円多くの人々に尊敬されている。また、千光寺の円空仏は有名。

飛驒千光寺 住職 大 下 大 圓

「あぶらむの宿」がこの度りっぱに完成されて本当におめでとうございます。

大郷御夫妻が気持を合わせ、家族みんなが力を合わせ、地元や支援者の方々の絶大な協力があって、まさしく人生の旅人の宿にふさわしい建物ができあがったことは、まことに喜ばしいことです。

私個人は真言宗の僧侶ですが、大郷さんに出会って以来、熱烈なファンになり、宗教の垣根を越えて友達の間に入れて頂いております。(自分で勝手にそう思いこんでは大郷さんにいつも迷惑をかけています)。大郷さんの持っている暖かく広い御心は私だけでなく、訪れて出会う人々を引きつけて止まないものがあります。「法(おしえ)は人に依ってはじめて拡まる」という仏語は、大郷さんのような人をいうのではないのでしょうか。

以前に「あぶらむの宿」となる元家というのでしょうか、解体中の古家を訪ねたことがあります。その時大郷さんも誰れも居なくて、私と私の子ども三人とでその古家の回りを巡ってきました。

日本の木造家屋はだれも人が住まないとどんどんさびれてゆきますが、一度人が手を入れ、そこの住み出すと新しい生命が蘇生します。

木魂は生きているのです。

これからそこでどれだけ多くの魂が癒されてゆくのでしょうか。本当に楽しみです。

飛驒に新しいネットワークが生まれようとしています。

いやもうすでに、そのネットは張りめぐらされていて、その縁を通じて人々が「あぶらむの宿」に向かっているかもしれません。

大きな組織でもなく、権力をもったものでもなく、金のあり余るものでもなく、一つ一つは弱くてたよりないものかもしれない。しかし、その弱い一つ一つが互いに強い結びつきをもって、じょうぶなネットをつくることは飛驒の農村に新しい日本のあるべき姿を見せてくれるのではないのでしょうか。

それは地球や宇宙の調和をめざす神の意志、善なる人々の意識なくしてどうして実現できるのでしょうか。

私達は等しく大自然の恵の中で生かされ、支えあって学習する徒なのでしょう。

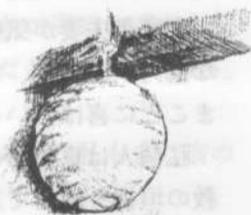
これからの「あぶらむの宿」をみんなで盛り上げましょう。

## あぶらむの里を訪ねて

14才にてハンセン病発病、現在沖縄の愛楽園に入園。日本聖公会沖縄教区執事職にあって、愛楽園祈りの家教会に奉仕。また歌人でもあり、歌集「十五夜月」を通して、苦悩の中にあっても信じて生きることの大切さと強さを語る。

松岡和夫

5年前、大郷先生が立教のチャプレンを辞任して岐阜であぶらむの里を建設すると言った時、私は御子様方の事を思って反対した。しかし大郷先生の決心は固く、その昔、主なる神がアブラムに『あなたは国を出て親族に別れ、父の家を離れ、私が示す地に行きなさい』（創世記12章1節）と言われたように、大郷先生も住み心地の良いハランの地、すなわち東京を離れて岐阜の国府町に移住された。目的は『人生旅路の中で疲れた人々が身体と心を休める宿』を造ることでありました。



そのため大郷先生は後援会事務所を西田邦昭氏宅に設け、国府では5千坪の土地を地元の町長様や有志の御協力を得て購入、また飛騨高山博覧会後の建物二棟を購入し家屋を建築、僅か4年で着々と完成に向かっていくことは驚くばかりです。1度は行ってみたいと思っていたところ、昨年5月立教大学の水谷チャプレンの御要望で上京、5月28日（日）立大チャペルで説教する機会が与えられ、翌29日、西田氏宅から大郷先生の運転する車で先生の二男耕輔君と友ちゃん達と一緒にあぶらむの里へ向った。

東京から飛騨までは3百キロ位、途中三回ほど休憩して（あぶらむの里）に着いたのが夕刻。

飛騨の山の雪を握りて食べおれば遥けくも来し思い湧きくる  
という歌が生れ、本当に『遥けくも来しかな』の感を深くしました。翌日、大郷先生の御案内で5千坪の土地に行った。唐松や榎の樹が空に伸びており、その林の中に作業小屋と整地用のユンボ等があり、これを大郷先生が操作すると聞いて驚いた。また大郷先生はフィリピンから仕入れてきた荒彫りの十字架、子供の天使像を磨いてニスを塗り、銀製の十字架のペンダント等も東京で展示して売上金を比島の孤児院に献金し、将来は同院から中学卒の少年達をあぶらむの里に連れて来て職業訓練を行う計画だという大郷先生のお話と、東京育ちの奥さんが野菜や水稻えを作り、遅しい農家の奥さんになり切っている姿にも深く感動しました。私はあぶらむの里を訪ねてよかったですと思いました。

働き者の奥さんと、理解あるお子様方と、地元の人々と後援会の温かい御協力によって、大郷先生の夢はあの美しい飛騨の山地で実りつつあります。私は大郷先生の素晴らしいお働きに拍手を送り、先生のお働きが神と人々に祝福されますよう遠く沖縄の地において、病友と共に祈りしております。大郷先生、奥さんガンバって下さい。

## 九州の地から、大郷さんへ

東京農大在学中よりアジアの農業に関わる。80-85年、一食献金運動に支えられネパールの農業開発計画に従事する。現在は福岡県にて自然農業と養鶏を営む側、農業を通しての人間開発、アジアとの協働を目指している。

千尋共育

佐藤 寛

飛騨の国府町を今までに二度訪れた。まだ雪の残っている三月に行ったときには、大郷さんがあぶらむの里の敷地を夢見るような眼差しで「ここには宿が建ち、あそこには木工の工場を作り……」とこちらの茫然とした顔には全く気付く様子もなく語ってくれた。きわめつけは敷地のほぼ中央にある大木をさし「去年のクリスマスにはここに豆電球を沢山付けた。きれいだったぞー。」

九州の山のお百姓さんの我が身にとってみれば大郷さんの話が壮大無比、雲の中。北海道の原野を買わされた人のその時の心理も私はその時チョット理解できたような気がした。

牧草の種を蒔き、草をそだてその草でニワトリを養い、卵を生ませその卵を配達するという生活をしていると自ずと考え方もチマチマしてくるのだろうか。それよりも国税調査のときなど私などは職業欄に農業と記入すればそれだけですんでしまうけれど一体大郷さんはなんと記入するのだろうかなどどうでもいいような感想をもちながら帰ってきた。

農業ならば第一次産業、工鉱業ならば第二次産業と昔習ったけれど果たしてあぶらむの里はどのカテゴリーに入ればよいのでしょうか。いいえ、あぶらむの里はきっとそんな既存の分類には入れられない活動になっていくのでしょうか。

大郷さんのところには犬が二匹いた。首から鎖を解かれると野を駆け抜け川を飛び越し、いっきに今までたくわえていたエネルギーを爆発させるように走りまわっていた。その姿を大郷さんにオーバーラップしては、犬さんに、いや大郷さんに失礼だろうか。

姿が見えなくなった犬を呼び戻すのに、大郷さんは人の耳には聞こえないが犬だけには聞こえる高い周波数をだすという「犬笛」を吹いていた。笛の音を聞いた犬はあわてて飼主のところへ駆け戻ってきていた。それを見ていてひょっとすると私達には聞こえないが大郷さんの耳だけには聞こえる「笛があり、それで行動を自由に操っている「方」がいるのかもしれないと思った。

もしかすると笛は二本あり、片方はきっと育さんが手にしているのだろう。笛が二本あり、持ち主がそれを紛失したりしない限り、あぶらむの里は、これからも発展していくことでしょう。大郷さん、どうぞこれからも笛の音には耳を澄ましていてください。

育さんの笛の音が聞こえないふりをしたりしないように。



## 宿での生活を体験して

### 家族として迎えられたあぶらむの宿での生活

筒井啓子

あぶらむの里には、昨日の新しい宿屋の上棟式の賑わいがまだ残っている様であった。隅の方で談笑していた人達に気遅れして佇んでいると、一人離れて私の方へ歩いてこられたのが大郷先生であった。「おめでとうございます。ずい分立派ですね」「いやぁ、皆さんのお陰です」先生はいかにも嬉しそうであった。

この春、初めてここを訪れたときには、まだ基礎も出来ていなかった建物が、いま夏の日を浴びて立っている。私も嬉しかった。

私が「いのちの電話」のボランティアをしていた時、先生は私達の勉強会のリーダーであった。当時、立教大学のチャプレンの職に在った先生が大学を辞めて飛騨高山へ行かれ、「あぶらむの宿」の建設に情熱を傾けておられることは知っていたが、あまりに遠くてお訪ねする折もないままになっていた。思い立って飛騨を訪ね何年ぶりかでお目にかかった時、日に焼けた頬に髭を生やし、作業衣に地下足袋姿の先生の変身ぶりに、眼を瞪る思いであった。その時は急用で慌ただしく帰ってしまったが、今度は仔細あって少しゆっくりさせて頂くつもりできている。

さて、次の日から私の「あぶらむの宿」での生活が始まった。私は先生の家泊りにしたが、宇津江の先生の家と山の宿屋とは3キロも離れているので、泊り客があると材料を運んで賄うのである。加えて新しい宿屋も建築中とあって、二足ならぬ三足の草鞋を履いての生活は容易ではなかった。その上、解体した民家の梁や柱などを使った残りの古材を燃やしたり、スーパーの一隅を借りて帽子を売っての資金作り、女子大生20人ほどのボランティアを迎える準備（これは殿方が楽しみにしていたようで、しばしば話題になった）それに、じゃが芋の収穫や稲の消毒のような農作業も季を外せない。普通の家庭のほぼ三軒分はあろうかと思われる労働のシワ寄せは、どうしてもその家の主婦の肩にかかってくる。育さんはそれを明るくエネルギーにこなしてはおられたが、かなり無理をしているのではないかと気がかりであった。

建築現場へ茶菓子を運んだり、買物に行ったり、時には豆の種を蒔いたりと殆ど一日中育さんと行動を共にしながら、人といることのあまり好きではない私が、精神的に疲れなれないのが不思議であった。高山にいる間、少しの違和感もなくありのままの自分で過せたことを私はありがたいと思っている。

違和感と言えば、この3月から転勤で神戸に住んでいる長男が出張で名古屋まで来た時、用があって逢いに行ったが、久しぶりの都会の雑踏や、ホテルのレストランの華やかな雰囲気の中で、なぜか自分を異邦人のように感じ、溶け込めなかった。

翌日、宿へ帰るため高山本線に乗ると、ふるさとへ向かうような安らぎを覚えたのである。宿ではいつもの賑やかな食卓と笑顔が私の帰りを待っていてくれた。

炎天下、新しい宿屋は日一日と家らしくなっていた。屋根を葺き、トタンを張って行く。その行程を目にするのは楽しかった。家の回りに石が配置されると一段と格調が高くなる。



先生はその作業に精を出しておられたが、気にいらないとあの重い石を何度でも積み直す。凝り性というのか、その気持はよく判るのだが、それにしても目を三角にして裕太君を叱咤激励し汗まみれでユンボを操作する先生を見ていると、「ご苦労様デス」と言いたくなかった。

朝夕の気温がやや低くなった或る朝、玄関の方が騒がしい。何かと思ったら、虻を持って来たのだ。庭先で捉まえたとかで、山で仕事をする者はよく見ておかにゃいかんのご親切に持って来たという。さらに「虻は旨いぞお」と煽られて、じゃあ今晚料理するかと、ビニール袋のまま冷蔵庫へ入れたのには驚いた。私はその日、麦茶が服みたくても冷蔵庫を開けられず、仕方なく水を飲んでた。夕方、帰ってきた先生は朝の勢いはどこへやら、オイ、裕太やれよ、と言う。彼はニヤリと無言。さっさと自分の部屋へ行ってしまった。結局、虻はもう一晩冷蔵庫に安置され、翌朝育さんが捨てて行った。橋の上から投げられる虻をチラと見たがもう死んでいて、虻騒動は一件落ち着いた。

山の自然には虻もいれば蛍もいる。飛騨へ行ったお陰で私は生れて初めて蛍狩りをした。蛍は方向指示灯を点滅させると仲間と勘違いして集まってくるのだと教えられて、気の毒な気がしたが、なるほど、林の中や近くの木で点々と光り初め、それが吸い寄せられるようにこちらへ流れてくる。思いもかけぬ幻想的な光りの飛行であった。スカートの中で光っているのもいて、エッチな奴だと笑われている。誰かのポケットに一つポッと光っている蛍が何ともいじらしい。7月末にまた行った時には、点滅する数が少なくて、山の夏は早くも盛りを過ぎたのであろうかと寂しかった。

蛍狩りの帰り、あぶらむの里の下の道にお化けが出た。体格のいい、朗らかなタチのお化けといえば、お判りであろうか……そう、育さんのお化けなのである。

夜になっても車はかなりひんぱんに上がってくる。多分、四十八滝方面へ行くのであろう。その車のライトに向かって、彼女はいきなり白いエプロンをガバッと顔にかけ、「お化けェ……」と叫んだのだ。大きな長靴を履いたこのお化けを何と思ったか、車は無事通過して行った。彼女はライトが近付くたびに「お化けェ……」をくり返す。初めはゲラゲラ笑っていた私達も、遂に辞易して、いつとはなしに反対側へ逃げるように移動してしまった。一人残されたお化けがおかしく、そして可愛かった。

「あぶらむの宿」の暖かさに甘えて、思わぬ長逗留をさせて頂いた私も、そろそろ

本来の主婦業に戻らなくてはと思っていた矢先、突然の事故で先生が入院された。

建築現場の梁から落ち、下に石があって、肋骨を折ったのである。すぐに救急車で高山の病院へ運ばれ、絶対安静と言われた時には、これから先どうなるのかと思ったが、熱も出ず、水も溜まらなかったのは不幸中の幸いであった。

先生の病状も落ち着き、私も明日は帰るという日、育さんと高山の町を歩いた。よく晴れて日差しはきびしかったが、風は爽やかであった。八幡宮の傍の和風喫茶店へ入り、炉端でくつろいだ時、心がのびのびと解放されて何とも言えず楽しかった。

それは私のようにネクラの人間には、滅多に味わえぬたぐいの「たのしさ」であり、その時の心のありようを私はとても大切なものに思っている。それは同時に「あぶらむの宿」を大切に思うことでもある。宿という土壌あっての檢りだと思うからである。

先生は「宿へ来た時はうちの家族です」とおっしゃってくださるが、私もまた宿の存在を「心の実家」だと思っている。

今年は山の紅葉を見に行かれなかった。来年は是非行ってみたいものである。

1990. 11. 12

### お待ちしております

\* あぶらむの宿での宿泊が可能になりました。

個人、ご家族連れはもちろん教会関係のお集まり、会社の研修などにもご利用下さい。30名から40名くらいの方にもお泊りいただけます。

\* 星座観察や森林浴が楽しめるほか、近くにはテニスコート、グラウンド、10カ所のスキー場などがあります。また農作業や木工作業をスタッフと共に体験するのも楽しいかと思えます。のんびりするなり、身体をリフレッシュするなり、どうぞご自由にご活用下さい。

\* 交通手段は 高山本線国府駅または飛騨古川駅下車、駅まで車で迎えに行きます。

車の方は、季節、方面により異なりますので、宿へお問い合わせ下さい。



## 座 談 会 11・18 東京編

### 私たちの現場から、あぶらむへのメッセージ

竣工式を間近にした11月18日、東京に住む4人のあぶらむの会々員の方々にお集りいただきました。深まる秋の静かな夜。それぞれの近況やいま感じている問題、あぶらむの里に寄せる熱い思いなどが語られました。その模様をご紹介します。参加者は鶴川久さん（S.38生）、寺西裕子さん（S.35生）、川上玲子さん（S.29生）、西田邦昭さん（S.26生）の立教大学を母校とする4人です。

**司会** まず皆さんの自己紹介を、大郷さんとの出会いを含めてお願いします。

**鶴川** 僕は8年半前に立教大学に入学しまして、1年の時にフィリピンキャンプ、次にクリスマス実行委員会、沖縄キャンプなどに参加しました。大郷先生からは何度もフライパンで殴られたようなショックを受けたことがあるんですが、100キロリレーの時、ようやくきちんと話ができただけかなあという気持ちがあります。で、実は先生が立教をやめた年に僕も卒業して、三菱電気というメーカーに就職しま



鶴川さん

した。はじめ神戸にいた頃、「大郷さん、高山にいるらしいよ」ということで、名古屋にいた悪い友達と月に一度くらい遊びに訪ねていました。雪の降りしきる中、ひとり暮しをしていた先生が（心細さの余りか）走り去る僕らの車に雪を投げつけたようなこともありました。だから、最初に高山の木工の学校で苦勞をされている頃からバイクで土地を探してあそこに決め、ここに家族を呼んできたいと言っていた頃も時々行っていましたから、この会には結構思い入れがあります。今は会社の海外事業部という所で半導体をヨーロッパに売るという仕事をしていて電話とファックスに夜遅くまでかじりついている毎日です。

**寺西** 私は港区立高陵中学校の国語の教師です。大郷先生とは立教のGFSというサークルやバロックコンサートなどで関わっていたんですが、うさん臭そうなチャレンダと気になっていました。で、沖縄キャンプへ行ったら、先生が大きな夢を持っていて、それを私たちに見せたいってことが分かって、それ以来ズルズルとつき合っています。卒業後、先生が高山に入られてからは人の心を休める宿屋を作ろうっていうのが、何となく私たちの夢にもなった感じです。

**川上** 私は大学を卒業した後、何をしたらいいか分からなくて大学でバイトをしていたんですが、その長いモラトリアム時代に、フィリピンキャンプの立て看板を見てどうしても行きたくなって、ボランティアスタッフとして参加して、大郷先生と知り合いました。あのキャンプは私にとって人生がひっくり返るくらいの出来

事で、そこで初めて仲間と深く話す体験をしたり……遅いんですが青春の始まりだったように思うんです（笑）。その後もネパールに一緒に行ったり、100キロマラソンでも走っちゃたりして、自分の考えている限界っていうのは、超えられるものなんだってこともわかりました。反発を感じたこともありました。今までもそしてこれかれも、自分に影響を与えてくれる人だと思います。正直言っていったん枠を外されたから、ちょっと困ってます（笑）。今は渋谷区の社会教育部青



寺西さん

少年課育成係というところで、いろんな企画をやったり、子供のリーダーを養成したりしているんですが、大郷先生のプログラムを体験しちゃうと区で活動している青年たちが物足りないんですよ。与えられた枠の中からはみ出そうとしない。大郷先生のやったことって、枠を取り払ってそこからエネルギーが出たってことだと思うけど、そういうエネルギーを引き出す教育が仕事の中でできないかなって思うんですが、なかなか難しいですね。

西田 立教大学の職員をしています。大郷さんと出会ったのは13年くらい前、立教のチャプレンとして赴任してきた時です。本当の意味で知り合ったのは、沖縄キャンプを一緒にやり始めてからです。そして先生が去られた後も沖縄キャンプを続けてきました。体調の悪い時は他の人に代っていただきました。大郷さんがこれまでやって来られたことは、若者の核入れ作業の手伝いだたような気がします。大郷先生と一緒に出会った若者たちは、その核をもってして、自分の人生を育てていっているように思います。更に今、何の因果かあぶらむの会の事務局をやっています。そこで感じるのは、人それぞれ夢があるんでしょうが、現実の中ではそれを果たしづらい所があって自分のできないことを大郷さんに託して、その働きを支えていきたいという人がたくさんいらっしゃるんだなあと、募金やあぶらむ債などで感じています。

司会 さて、その夢だった宿がついに完成しましたね。

西田 初めてこの構想を大郷さんから聞いた時、全部で一億円くらいかかるというのでそんなバカな、とびっくりしたんだよね（笑）。

川上 大郷先生はいつもびっくりするような事を言い出して、でもそれを現実にしてきた人だもんね。

司会 それでは皆さんの仕事や生活の場で、どんな問題を感じているかを寺西さんからお願いします。

寺西 問題はいろいろあります。個別教育っていうと聞こえがいいんですけど、最近の中学生は他人に関心を持っていないんですね。音楽で合唱をやっているとき、『和音の和』の意味が分からなければ、みんなの心がひとつになったよ合唱はできない」って突き放したことがあるんです。結局、女子生徒の何人かが泣きながらクラスメートを説得して、またみんな教室に戻ってきたんですけど。

西田 大学生もそう。他の人の事には余り関心がない。自分の事で精一杯という感じ。

鶴川 企業にいても、ここ2・3年入ってくる人は特にそういう感じですよ。だから働き盛りの人達は戸惑ってますよ。一体これは何なんだって、僕が聞かれたりするんです。こういう新しい世代が増えてきていることから、もうこれまでのような日本の経済成長はありえないだろうって気がするんだけど。

西田 教育の面から見ると、経済的な豊かさのみが先行し過ぎているということがこういう状況を生み出してきているとも言える。就職についても売り手市場だと言われているけど、それがルールに乗ってさえいれば何とかかなるという意識を生み出したんだろうね。

司会 鶴川さんは、上の世代の人たちをどう思いますか。

鶴川 僕は就職する前、企業人と言うのは利益優先でアジアの人たちを踏みこみにして、も何とも思わない人たちだと思っていたんですが、実際にはごく普通の人たちばかりで、与えられた仕事をコツコツと一生懸命にやっているだけなんです。家族や社会のためにみんなガンバロウってやってきたんだと思うんですが、就職して4年半、僕は今、企業で毎日必死に働く人たちが、なぜあそこまでがんばれるのか、そのモチベーションに興味があるんです。

司会 それにしても若い人の変化は時代の変化ということなんでしょうか。

寺西 学校で子供たちに「工業高校って何する所？」って聞かれて「コンピューターや車の事を勉強する所」って答えたりしてるんだけど、一年生の時には船乗になりたいって言う子もいるのに三年生になると普通高校へ行くのがよいとみんなが考えるようになってっちゃうんですよね。価値観が一つになってしまっただけ。

川上 最近いくつかの農村を訪ねたんですが、農林業を継ぐ若い人たちは驚くほど少ないんです。林業なんて環境問題を考えるとすごく大事な仕事なのに。山形の高島町へ行った時も、農業高校へ行くのは本当に農業をやりたいからではなく、偏差値で輪切りされた結果だと聞きました。



川上さん

西田 自分の子供の事を考えると、制度的な学校教育には限界があるから、親としてはできるだけいろんな世界に出合わせてやりたいと考えているんだよね。いろんな世界を知ることが、迷うことになるかもしれないけど豊かな選択ができるんじゃないかと思ってるね。

寺西 今の子供たちは、日本が経済的に超一流国だと疑ってないですね。私が小さい頃はそうじゃなかったのに。

西田 僕が小学生の時には社会科の教科書に貿易赤字って書いてあったのを覚えているよ。それが工業製品の輸出で黒字になって日米摩擦が起きて、農産物を自由化しろと言われて日本の農村が破壊されそうになっている。一方で、日米構造協議などで大幅な内需拡大が求められて、リゾート法が作られ、リゾート開発が進ん

で自然が破壊されてゆく。今の日本は社会としてのバランスが崩れて、いびつな形になってしまってるんだよね。

**川上** 私のすんでいる杉並は、この夏、ほとんどずっと光化学スモッグ注意報が出っ放しだったんです。東京はどんどん住みづらくなっていくような気がしますね。話題になっているゴミ問題では、日本は行政に責任を取れという人が多いのに、欧米では企業が責任を自覚していると聞くんだけど、日本の企業はどうなんですか。

**鶴川** ヨーロッパの中にはリサイクルできるか、完全に処理できる製品しか作っちゃいけないという法律が通りそうな国もあります。こういう行政レベルの規制が始まっている国もあるんだけど、日本ではまだだし、市民の意識が変わって企業を変えろという所までもいっていないんじゃないでしょうか。広く環境問題を考えると、一つの答えとして現在の生活レベルを下げざるを得ないという見解があると思うんですが、それを今の日本が受け容れられるでしょうか。本当は個人の意識が変わることから環境問題の解決も始まるんだと思うんだけど、いくら個人ががんばってもどうしようもないと思ってしまう人が多いんじゃないかな。そう思うのは、まずいと思うんだけど。

**西田** 世界の0.2%の国土で、2%の人口を占める日本が20%もの資源を使っている



西田さん

というのはとてもおかしい状況だよね。このいびつな形になった日本は自律作用を失っていると思う。けれども環境問題は全地球的な問題になってきているから国際的な批判が巻き起これば、これまでのようにはいなくなるんじゃないかな。そういう批判を受け止める感性は残っているだろうと期待したいね。

**司会** 寺西さんは、東京生れで東京育ちなのに、教育研修で二年間、新潟へ行ったそうですが、都会と地方の生活をどう思いますか。

**寺西** 新潟市内ではなく、土越市という所にいました。コシヒカリの田圃に囲まれてた訳だけど、春になると一斉に田植が始って、苗が伸びる、風が吹いて青い稲が揺れると緑の風を感じるんです。秋は穂が垂れてきて黄金色に染るんですよ。バスは一日に何本しかないけど馴れれば苦痛じゃないし。ただ映画館は町に3軒しかないし、コンサートがあれば競ってチケットを手に入れるんです。都会ではいつでも見られたのに。でも結局、東京に戻ってからのほうが忙しくて、みられなくなっちゃったんだけど(笑)。だから今でも月に一度くらい、東京を抜け出して地方の空気を吸いに行きたくなっちゃう。

一同 (うなづく)

**西田** 僕はそろそろ40歳を迎えるんだけど、長く仕事をやっていると思うと頭脳というか頭の方の方は大きくなってゆくの、肉体の方がちょっと待ってくれ、もうだめだと反乱を起こしてくるんだよね。都市の時間の流れの速さに疲れてくるんだと思うん

ただ、ゆったりとした時の中に身を置きたくなる。だから、そういうあぶらむの里になってほしいと期待してるんだよね。地球と人との関係を考えると、頭脳を持った人間がどんどん先行して、地球という肉体がもういやだいやだって言ってるんだと思う。



川上 私もデスクワークばかりしていると、土にまみれて汗が流しくなるんです。山へキャンプへ行ったりすると、子供たちはテントの中でトランプばかりしていて外へ出ようとしません。その子の親たちは「この野草は食べられる」とか言って喜んで走り回っているのにね（笑）。自然の魅力とか汗を流す気持ちよさを知らないまま子供が育つのは、将来のことを考えるとこわいですよ。

司会 積極的に農村に関わっている川上さんは地方へお嫁に来ないかって誘われませんか。

川上 田舎の良さはよく分かるんですけど、やっぱり意識に壁があると思うんです。私の回りでは、夫婦別性とか家事分担の平等とかがだんだん当たり前になってきて……、今後、農村と都会は「いきなり嫁に来い」じゃなくてお互いの考えをぶつけ合うような交流が必要なのは、と思います。

寺西 東京にいる時に農産物の自由化と聞くと、やってもいいんじゃないかと思ったけど、地方を体験すると彼等の目で考えられるようになったからでしょうか。そうは言えなくなりましたよ。

川上 安全なものならいいけど汚染されたものは嫌だしね。ネパールから帰ってきた佐藤寛さんもニワトリの平飼いをしながら新聞みたいなものを出してがんばっているし、地方で村おこしを進めている所は、みんながんばってますよね。

西田 立教では山形県高畠町で地域ぐるみで有機農業に取り組んでいる人たちと交流しているんだよね。傲慢な言い方かもしれないけど、彼らはキャンプに行く学生や我々を通して、彼らの持つ可能性とか豊かさというものを見い出してくれるんじゃないかと思う。そして高畠の人たちは「自分たちは単に農業をやっているんじゃないんだ。農業、教育、文化、医療とトータルな形での農村づくりをやっていくんだ。」と言うんだよね。だから、あぶらむの宿に都会から人間が行って、もし国府の持っているものの中で我々が生き生きしていくなれば、逆に国府の人たちも、もしかしたら今まで気づいていた以上のものを土地が持っているんだと、気づいてくれるんじゃないだろうか、そんな形の橋渡しの役割があぶらむにあっていいんじゃないかと思うんだよね。

鶴川 確かにあぶらむの会ってのはある意味で中途半端な形で、国府の人たちから見ても僕たちから見ても面白い所だし、どうにでもできるとも言えますよね。とりあえず場所があって、人がいて、建物ができて、どう使うかってのは結構、面白く勝手にできるんじゃないかって。

川上 勝手にできるって所が、すごくいい所だと思うのね。役所の施設を使って交流

したりすることもあるけど、勝手にできないのね。夜何時までとかお酒を飲んじゃいけないとか。フリーでやっている所は可能性をもっと広げて、あぶらむの里も、必ずこういうふうにやらなきゃいけないとか、毎年やらなきゃいけないとか考えないで、行き当たりばったりでどんどんやっていくという施設であってほしいのね。大郷先生の人生もそうなのかもしれないけど。

一同（笑ってうなづく）

西田 やっぱり僕は、あぶらむの里ってのはひとつのキャンパスだというイメージがすごく強いんだよね。どういう絵を描き、色をつけるかはみんなで作ることで大郷博一人の絵だけじゃ面白くないんだよ。

鶴川 大郷さんは、最初にこれやろうってアイデア出したり、他の人を引き込んだりすることは得意だけど、それから後は、誰か大勢の人たちがサポートしないとね。

西田 一人一人が絵を描くために、みんなが三千円、一万円と出し合って支えている後援会なんだからね。

司会 鶴川さんなら、いまどう使ってみたいですか。

鶴川 いま会社において思うのは、課長さんぐらいになると、固まっちゃうのね。仕事こう、会社こう、子供がいて食わせなあかんとなると結構かわいそうで、夜赤坂行ってカラオケ歌うしか楽しみなくなっちゃったりしてね。例えば最近、企業が課長とか部長に1ヵ月とか3ヵ月の休暇をくれるところがあるでしょ。そういう人たちがポーンと行って薪を割って過ごしてもいいだろうし。それから僕自身は2、3ヵ月に一回先生の顔を見に行き、あの多目的ホールのベランダに椅子を出して一日ポーンと本を読んでみたいなあ。そして、僕自身が大学の時にショックを受けたフィリピンキャンプの様な日常と違うところへポーンと行って違う世界をみるという、そういうプログラムとか働きがあったら面白いだろうと思う。それで採算取れるかどうかは別として（笑）。

司会 会で働きたいと思ったこともある寺西さんはどうですか。

寺西 ずっと考えているんだけどね、老後のために（爆笑）。でも、あそこに入るためには、大郷先生の夢をお手伝いするんじゃなくて、自分の夢を持って入らなければ長続きしないだろうと思うのね。だから西田さんの言うようにキャンパスに



（カット高瀬留美）

みんなが絵を描いて、それをぶつけ合ってやっていく中であぶらむの村人になっていけると思うんだけど。実はきょう、大崎の協会で「あぶらむの宿ができるんだってね」と言われたわけ。つまり私たち仲間だけじゃなくて、かなりたくさんの方が関わりを持って期待してるのよね。だから一人でも多くの方が、何らかのチャンスに訪れるといいと思う。高山って東京からは行きにくい所だけど、中部地方の人たちや日本海側から行ける人もいるし、関わってくれている人たちは全国にいるわけだから、年一

一回でも足を運べるといいですよ。それから山村留学みたいな形の交流もいいですよ。子供にとって仲間ができるってすごく嬉しいことだから、地元の子供たちにとっても。それから、申し訳ないけど学校教育ではカバーしてあげられない子供たちがいる訳ね。登校拒否だけじゃなくて、登社拒否の大人もいるでしょう。もしその人に行く意思があれば、星と緑の美しい高山へ行ってみたらと勧めたい。それから教育セミナーに参加した時、野村のおじいさんが「30年経った木は30年もつ」と言ったのが教師の言葉と違って、ずしっときたのね。だから、何が大切か、どこに価値観を置くかって事が伝わってくる場所のような気がするの。他にはフィリピンや沖縄キャンプのようなことができるかもしれないし。日本にある同じ様な役割の場所とつながった発信基地みたいな役割をしてもいいだろうし。

鶴川 そのためには、組織とかスタッフとかいろいろ考えていかないと。それからテニスギヤルが気軽に泊るのもいいから、毎週金曜日に東京発の小型バスが出るとか、考えてもいいんじゃないかな。

川上 施設としては、障害者の施設が一般の人を受け容れている宿など、他にもありますよね。でも平和ウルトラマラソンとか走ることを一緒にやっている宿って他にないですよ。走るというテーマというか看板のついた宿は、面白いと思いますね。

司会 とにかく、これからのあぶらむの会ですから、これからもいろんなご意見やご希望を聞かせて下さい。今日は遅くまでどうもありがとうございました。

(司会・文責 川上美砂)

## 後援会事務局だより

日頃、「あぶらむの里建設募金」にご協力いただき、誠にありがとうございます。

竣工式を2日後に控えた日の夜、大郷先生が教え子の結婚式に出席するために、竣工式の準備に忙しい合い間をぬって、東京に出てこられました。地元の方々にご依頼した原稿を受け取るためにお会いし、久しぶりに語らいの時を持ちました。先生は、竣工式の準備でお疲れのご様子でしたが、そのお顔は、大きなことをやり遂げた満足感に満ち溢れ、同性の私が見ていてもホレボレするほどでした。いろいろなお話をしたのですが、その中で「世の中に贅を尽くした家は数多くあるが、これほど思いを尽くした家はないよ」と嬉しそうに話してらしたのがとても印象的でした。

そして2日後竣工式に伺ったのですが、地元を代表して御挨拶いただいた川上町長様のお話の中にも、「普通、家は建ててから魂が宿るものだが、あぶらむの宿は先に魂が寄り集って建てられた家だ」というようなお言葉がありました。

大郷先生をはじめとするご家族の方々、そしてこれまでご寄付いただいた延べ1660名の方々、あぶらむ債を購入して下さった106名の方々、宿の建築に携わって下さっ

た方々、地元飛騨の方々、その他多くの方々の思いが寄せ集められ、あぶらむの宿は完成しました。本当にありがとうございました。後援会の事務局の一人として、言葉では言い尽くせない喜びで一杯です。

大郷先生と語り合った夜、先生に「夢が実現しましたね」と言葉をかけたところ「イヤ、やっと夢の入口に立ったばかりだよ。この与えられた宿を使って、どのような人を育てていくか、これからが本当の夢の実現だよ」と返事が帰ってきました。何が一体この人をしてこれほどまでの情熱を生み出させていくのか、ただただ驚嘆するばかりです。大郷先生がこの宿をどのように生かしていくのか楽しみです。一方での私達に与えられた宿の主人公は、あぶらむの会に関わって下さっている皆様方一人ひとりです。是非そのためにも、建築費の残りおよそ800万円の支払いのために、募金ならびにあぶらむ債の購入のほど何卒、皆様方のご協力とご支援を賜わりたく、心よりお願い申し上げます。

(事務局 西田)

11月30日現在の募金ならびにあぶらむ債の申し込み総額は以下の通りです。

募金申し込み総額 32,076,880円

あぶらむ債(1口10万円、5年間借用、無利子) 21,100,000円

※送金先 (募金・あぶらむ債共通)

郵便振替 東京7-255427 あぶらむの会後援会

銀行振替 第一勧業銀行池袋西口支店 190-1434535

あぶらむの会後援会 代表世話人 八代 崇

○11月30日現在の募金申し込み者(順不同・敬称略11月30日以降の方は次号にて)

鋤柄不二子 菊間みどり 伊東友昭 中村洋 岩間光雄 池田寿美子 糟谷珠子 鶴貝隆 比嘉マツ 山里ツル 新田智恵子 安藤希代絵 斎藤友子 弥永昌吉 森本光生 吉田保子 篠宮慶次 矢部直美 阿久津富男 木田献一 青木道一 長谷川勉 堀田利子 沼尾博 佐口哲 鈴木千絵・ピーターカーティス 橋本艶子 R・A・メリット 鈴木博士・彰子 田中幸治 近藤真紀 進藤武 隈崎加代子 島田信弥 筒井啓子 田中一有 河村博之 川上詩朗・美砂 高瀬由香 屋良朝夫 W・F・ハママン 高坂征男 海宝道義 鴨下至治 中山弘 沼尾康彦 深野毅 熊谷一綱

○11月30日現在のあぶらむ債申し込み者(順不同・敬称略11月30日以降の方は次号にて)

城下彰 星野一朗 宮川あつみ 神山正之 久保田純子 ジーン・レーマン・幸子 寺本康朗 池田雅人 萩原久子 浜田陽太郎 田坂昭範 浅野純子 石井光子・正郎 鈴木博士・彰子 田尾兵二 野田修治・洋子 本田リン 佐藤六郎 仁木敦子 深田馨子 朝日奈誼 森田浩史 小泉恵子